【2】 研究の経過と本年度の取り組み

〔1〕 平成４年度（１年次）の取り組み

昨年度、新たに「コミュニケーションに視点をあてて」の副題のもと研究に着手することとなった。中学部でも、コミュニケーションとは何か、中学部の生徒のコミュニケーションの実態はどうか、中学部の生徒につけなければならないコミュニケーションの力とは何か、等について考え、研究の方向を模索した１年であった。

(1) 実態把握の方法の検討と実施

生徒のコミュニケーションの実態把握の方法として、毎年行っている津守式乳幼児発達検査、段階別教育内容表のⅣ段階到達度評価、「生活リズム調査」や「性に関する調査」を継続すると共に、S－M社会生活能力検査、コミュニケーション・サンプルの分析を新たに取り入れ、実施した。

(2) 研究の構想の立案

実態把握を進める中で、中学部のめざすコミュニケーション像「楽しんで、豊かに人とかかわる子」を設定すると共に、124頁の資料に示すように、コミュニケーションに関するつけたい力を検討しまとめていった。個々の生徒についても、資料に示すように、個人目標とつけたい力、めざすコミュニケーション像とコミュニケーションに関するつけたい力を検討し、個人の課題を明確にした。また、これらの目標や課題を達成するための具体的な実践の場面として、「生活単元学習」「課題別学習」「日常生活の指導」を取り上げ、研究を進めることとなった。これらの研究の構想は、73頁に示すように「研究の構想図」としてまとめられていった。

〔2〕 本年度（２年次）の取り組み

１年次に立案した研究の構想に従い、実態把握を継続しながら、授業づくりの実践を重ねていった。また、本校のコミュニケーションの考え方が明らかにされる中で、中学部でも、コミュニケーションの力を育てるためのねらいが焦点化されまとめられた。

(1) 実態把握の継続

昨年度実施した各実態調査・検査を継続して行うと共に、今年度新たにWISC－R知覚検査を全員に実施し、考察が加えられた。結果及び考察については、69頁の「生徒の実態」に示すとおりである。また、これらの考察をどう指導に生かしていくか、ということについて話し合いが重ねられた。

(2) コミュニケーションにおける中学部のねらいの設定

次に挙げる５つの点について、中学部のねらいを設定し、全体的な高まりをめざして実践していくこととした。

①（意欲・態度）自分の持つコミュニケーションの力を十分に活用していこうとする意欲や態度を養う。

②（受容）相手の伝えたいことを受けとめ、理解する力をつける。

③（表出）様々な知識・表現手段を習得し、自分の想いを表現する力を身につけさせる。

④（環境）より多様なコミュニケーションの対象や場を保障し、社会生活への関心の広がりを持たせる。

⑤（自己認識）思春期を迎えた心とからだを自分なりに受けとめ、見つめさせる。また、人との関わりを大切にした取り組みの中で、自己内対話を活発にし、自制心の確立を図る。

我々は、まず①で述べたように、生徒が人と関わりたい、思いを伝えたい等の気持ちを十分に抱くことがコミュニケーションのベースとなると考える。そして、②や③で記したような基礎的な技能を、「読む」「聞く」「書く」「話す」等の個人の課題に応じて伸ばしていきたい。さらに、身につけたこれらの技能は、④に示すように、実際の生活の場面で十分に生かし使わせ、生きて働く力として定着させていきたい。また、⑤で述べたように、他とコミュニケーションをすると同時に自己内対話も充実させ、目的意識や見通しを持った自制心の伴った言動ができる生徒を育てたいと考えた。

(3) 授業づくりの取り組み

① 授業づくりの観点の設定

授業づくりを進める中で、「単元や題材の設定及びその配置」「指導者の関わり方」「個を生かす指導の工夫」「家庭との連携」について、74頁に詳しく述べるように、授業づくりの観点が定められ、実践にも生かされることとなった。

② 授業づくりの実践

中学部は、授業づくりの主な実践の場として、次に挙げる3つの指導形態を選び、取り組んだ。

「生活単元学習」―― 生徒が多様なコミュニケーションの対象や場を得て、楽しんでコミュニケーションをしながら、生きた力とする学習の場である。「野外炊飯」「ミニキャンプ」「大山林間校」「学習発表会」「お客様を迎えよう」を研究単元とし、授業研究会を持ちながら、取り組みを展開した。

「課題別学習」―― 昨年度から、学級を解いた課題別のグループ編成とし、グループの実態に応じた指導の工夫や手立てを考えながら進めた。主に、コミュニケーションの基礎的な技能を身につけさせる学習の場だと考える。

「日常生活の指導」―― 中学生らしい言動、応答の仕方、挨拶、マナー、敬語の使い方等について、日々の繰り返しの指導の中で定着をはかる学習の場とする。思春期を迎えている中学部の生徒の実態や家庭でのコミュニケーションの様子につても調査し、指導に生かした。

(4) 個に視点をあてた個人事例の追究

学部の共同研究を背景に、各担任が、対象児を選び、仮説を立て、意見交換をしながら事例研究を進めた。この意見交換を通して、生徒に対する様々な考え方が出され、共通理解が図られ、次への手立てが考えられていった。

また、各個人事例の追究をすることで、対象児以外の生徒にも般化され、指導に役立てることができた。